

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：12614

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K17229

研究課題名(和文)レジリエントな地域社会を構想する新しい理論の構築に向けた領域横断的な社会学研究

研究課題名(英文)Trans-disciplinary sociological studies to construct new theories toward a resilient community

研究代表者

萩原 優騎 (Hagiwara, Yuki)

東京海洋大学・学術研究院・准教授

研究者番号：20468565

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文):レジリエントな社会の構築は、現代日本における重要課題の一つである。しかし、それをどのように実現すればよいのかということについて、従来は必ずしも明らかにされてこなかった。こうした状況を改善することを目的に、どのような条件下でレジリエントな社会が実現し得るかということが、主要な研究課題である。それぞれの地域の個別性への配慮と、地域を越えた共通課題に関わる合意形成を両立する方途を、社会学、倫理学、精神分析の観点から領域横断的に探究した。

研究成果の概要(英文): Building a resilient society is one of the important tasks in the contemporary Japan. However, how to achieve that has not necessarily been clear. A main topic is to find necessary conditions of resilience of society to improve such a situation. I explored trans-disciplinarily how making much of the diversity of communities can be connected to reaching consensus on common issues beyond the boundaries from the view of sociology, ethics, and psychoanalysis.

研究分野：社会学 / 倫理学

キーワード：レジリエンス リスク 環境社会学 環境倫理学 科学技術社会論 精神分析 安全学 再帰的近代化

1. 研究開始当初の背景

東日本大震災において日本社会は、大規模な地震及び津波、原子力発電所事故などの「想定外」の事態を経験した。しかし、どのように綿密な想定を試みても、「想定外」を完全になくすことはできない。「想定外」の事態が発生した際に、致命的な状況に陥ることをどのように回避するかということが、災害に強い社会の在り方を考える上で重要な課題となる。そこで注目された概念が、「レジリエンス(resilience)」である。生態学者のC. S. ホリングの定義によると、レジリエンスとは、変化や攪乱を容認しつつ、なお当該集団の関係を維持する能力である。

ただし、(1) どのような観点から、(2) どのような規模を想定して、(3) どのような方法でレジリエンスを設計するかということ次第で、社会がレジリエントであることの意味も大きく変わるはずである。このような問題意識を持つに至った背景には、これまで環境社会学や環境倫理学を主軸に展開してきた研究がある。そこでの中心的な問いは、各地域の個別状況を視野に入れず、あらゆる地域に適用が可能であると想定された議論は、本当に実効的であり得るかということである。この問いをめぐって、地域社会にとって望ましい意思決定を実現するための条件について、2008年度から2010年度に科学研究費(特別研究員奨励費)によって研究を展開した。それによって得られた成果を基礎として、社会のレジリエンスの在り方を批判的に再検討することが可能になるのではないかと考え、本研究に着手した。

2. 研究の目的

社会のレジリエンスの設計に関わる新しい方法論を領域横断的に開発し提唱することを、本研究全体の目的として設定した。この目的は、以下の三つの研究課題の探究を通じて達成され得るものである。

第一に、レジリエンスを設計する際に採用する観点についての問いである。レジリエンスの設計においては、それぞれの場面の個別状況を視野に入れることが重要である。この点について、地域の多元性をどのように位置づけるべきか、どのように地域を越えた共通課題に取り組めるかということを経験的に考察する。

第二に、レジリエンスを設計する際に想定する規模についての問いである。小規模から大規模に至るまで、それぞれのシステムの規模に応じてどのような課題設定が必要となるのか、その際にどのような点に配慮すべきなのかということを検討する。また、異なる規模のシステム間の相互の関係についても、考察を展開する。

第三に、レジリエントなシステムの設計・運用に関わる方法と条件についての問いである。地域社会のレジリエンスを構想する際に、当事者たちがより望ましいシステムを設

計し運用していくにはどのような条件が必要となるのかということを経験的に考察する。システムを設計し運用する主体の認識に焦点を合わせ、その形成過程や変容の条件を明らかにする。

3. 研究の方法

社会におけるレジリエンスに関する研究を、領域横断的に展開した。地域の個別性と地域を越えた共通課題への取り組みとの関係については、環境社会学、科学社会学、環境倫理学を主軸として探究した。また、レジリエンスを発揮するシステムを設計・運用する行動主体となる地域の人々が、どのように社会集団との関係や人間関係を形成しているのか、それはどのような条件下で変容し得るのかということを経験的に、臨床社会学や精神分析の視点を援用して考察した。また、理論研究によって得られた成果に関して、事例研究を通じてその妥当性を検証した。

2016年度には、本研究を開始するに当たり、レジリエンス及び関連領域についての先行研究を精査し、そこで問われている主要な論点と本研究との関連性を検討した。特に焦点を合わせるべきであると考えたのは、レジリエントな社会の構想が画一的な基準として機能してしまう危険性があるという問題である。そうした問題を回避するには、社会の多様性というものをどのように位置づければよいのかということに関して、環境社会学、科学社会学、環境倫理学の観点から領域横断的に考察した。そして、そのような多様性に関わる認識を、地域規模から地球規模に至るまで、様々な規模でのレジリエンスの設計・運用過程にどのように組み込めるのかということを経験的に、社会のレジリエンスを主題とした先行研究において示されている各種の論点との関連で検討した。

2017年度には、前年度の成果を土台として、地域社会の個別性を視野に入れたレジリエントなシステムの設計・運用と、地域間や国家間でのレジリエンスの実現という共通課題への取り組みとの両立を、様々な規模のシステム間の相互関係の中でどのように実現できるかということを経験的に、主たる検討課題とした。その際に着目したのが、社会学を中心とした「リスク社会」に関する議論である。この視点到に依拠しつつ、それを批判的に問い直すことは、レジリエントなシステムの実現の条件についての探究であると同時に、その実現を阻む様々な困難の所在を明らかにするという作業でもあった。また、レジリエンスの発揮が期待されるシステムの設計・運用に関わる主体が地域社会にどのように位置づけられているのか、そこでのリスクをどのように認知しているのかといったことを、臨床社会学や精神分析を援用して考察した。それは、当事者の現時点での認識がどのように形成され、どのような条件下で変容し得るのかという問いである。

4. 研究成果

本研究の最たる成果は、社会のレジリエンスに関して様々な領域において展開されてきた議論を、主に社会学と倫理学の観点から批判的に捉え直すことによって、その再定義、再編成を行ったということである。

第一に、レジリエンスを実現するという目標を、価値の多元性と普遍性の関係という観点から検討した。この目標をあらゆる場面に画一的に適用する政策は、地域の個性、多様性への配慮に乏しいゆえに、実効的なものにはなり得ないと論じている先行研究がある。一方で、地域の多元性に立脚した主張を、無批判に承認してよいのかという問いも成り立ち得るだろう。また、地域の多元性を静的なものとして捉えるのではなく、当事者の認識や人間関係を動的なものとして捉え、その変容の可能性も視野に入れた意思決定の在り方を構想することで、よりしなやかな社会の在り方を構想できるはずである。ただし、そのように述べることは、地域間での目標や議論の共有の否定を意味するわけではないだろう。地域の多元性に立脚しつつ、地域を越えた協働をも可能にする意思決定の可能性を、環境社会学や環境倫理学の視点から論じた。

第二に、レジリエンスの規模に関わる問いを探究した。地域規模、国家規模、地球規模など、様々な規模でのレジリエンスの実現が目標として設定され得るが、それらの相互の関係について、先行研究においては論点の整理が必ずしも明確にはなされてこなかった。異なる規模のレジリエンス間への関係は、常に良好であるとは限らず、矛盾をはらんでいたり、大規模な目標の実現のために小規模での犠牲が生じたりすることさえ想定し得る。また、それぞれの規模の政策において立てられた目標が、他の規模の目標と連動していなかったり、相互の関係を十分に視野に入れることができたりするといった問題もある。これらの点を自覚した上で、それぞれの規模において、また、異なる規模間でのレジリエンスをどのように実現すべきなのかということが、問われなければならない。本研究では、そのことを環境社会学と科学社会学の観点から批判的に検討し、従来の意思決定の在り方を再編成するモデルとなり得る方向性を示した。

第三に、レジリエンスの実現に取り組む主体の認識と行動について、臨床社会学や精神分析の観点から考察した。従来の研究では、社会のレジリエンスが発揮されるためには、それに関わる人々の集合的な能力としての適応能力が重要であると論じられてきた。しかし、そうした能力がどのように発揮され得るのかということについて、曖昧な点が多かった。そこで、認識主体としての個人が、社会においてどのように形成されているのか、そして、個人の在り方、個人と社会の関係は、

どのような条件下で変容し得るのかということ、精神分析における主体の構造というモデルに即して明らかにした。この論点に関わるもう一つの重要な検討課題は、災害発生時など、レジリエンスの発揮が期待される状況下では、社会の秩序の不安定化、個人の心理の不安定化といった事態も生じ得ることである。これら両者の関係はどのようなものなのか、そして、直面する危機的状況を乗り越えてレジリエンスが発揮されるためには、どのような条件が必要なのかということ論じた。

第四に、上述の三つのアプローチを併用した考察によって得られた研究成果を挙げる事ができる。それは、20世紀の後半から日本社会で盛んに論じられてきた「安全・安心」という論点、東日本大震災を経験して以降の社会におけるレジリエンスについての議論と、どのように共通し、どのように異なっているのかということである。そのことを、村上陽一郎が提唱した「安全学」との関連で検討した。安全学に対しては、東日本大震災での津波災害や原発事故との関連で、批判的な見解も提起された。しかし、それらの批判において見落とされていたのは、安全学の視点がレジリエンスのさらなる向上に寄与し得るということである。この点について、安全学が提示する価値や制度を、レジリエンスをめぐる議論と比較・検討することによって、安全学をどのように刷新していくことが必要なのか、そのために取り組むべき課題とは何かということ論じた。

第五に、以上の研究成果が得られた後に、なお検討すべき論点があることを示した。それは、現代社会における合意形成の困難という問題である。社会の秩序の不安定化、価値の多様化が進行する状況において、既存の社会集団やそこでの人間関係を前提とした意思決定は自明ではなくなっている。この点について、ウルリッヒ・ベックのリスク社会論、スラヴォイ・ジジェクによるリスク社会論に対する精神分析の観点からの問題提起、リスク社会論とは異なる視点からリスクの問題を論じるニクラス・ルーマンのシステム論を参照しつつ、これらの議論をも批判的に再検討することによって、多角的に考察した。こうした論点は、社会のレジリエンスを実現するという目標の達成が必ずしも容易ではないことを示しており、そのことを視野に入れないまま意思決定が行われること自体が、一つのリスクになり得ると言える。

以上の五つの研究は相互に関連しており、総体として社会のレジリエンスの実現に向けた新たな意思決定システムの在り方を論じたものとなっている。従来は、必ずしも相互の関連性が認識されていなかった諸領域の研究を、「社会のレジリエンス」をキーワードに比較・検討し、相互の共通性や差異を確認した。それにより、社会のレジリエンスの在り方についての既存の理論や意思決定

システムの諸前提を問い直すとともに、より実効的なものになるように、その刷新が試みられた。その意味で、本研究においては、社会のレジリエンスに関わる研究の新しい次元を領域横断的に提示することができたと考える。ただし、これらの研究に基づいて、議論をより発展させていくことが重要であるとともに、本研究の成果を実際に各種の現場に適用することによって、その実効性を継続的に検証し、必要に応じて再検討していく作業も不可欠である。したがって、本研究では当初に設定した課題をおおむね達成できたが、最終的に得られた成果を出発点として、さらなる研究を展開しなければならないと言えよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

- (1) 萩原優騎 「環境倫理学のグローバルな次元とローカルな次元の関係」、『共生科学』第 9 号、2018 年、査読あり。
- (2) 萩原優騎 「現代社会における合意形成の困難」、『社会科学ジャーナル』第 85 号、2018 年、査読あり。
- (3) 萩原優騎 「東日本大震災後の安全学の課題と可能性」、『社会科学ジャーナル』第 84 号、2017 年、査読あり。
- (4) 萩原優騎 「レジリエントな地域社会の実現のための通訳型リーダーの役割と課題」、『社会科学ジャーナル』第 83 号、2017 年、査読あり。
- (5) 萩原優騎 「地域社会のレジリエンスとその条件」、『社会科学ジャーナル』第 82 号、2016 年、査読あり。

〔学会発表〕(計 5 件)

- (1) 萩原優騎 「『エディプス以後』を議論の前提としてよいのか」日本ラカン協会、2017 年。
- (2) 萩原優騎 「レジリエンスの諸問題を社会学理論が扱うことの意義」日本社会学理論学会、2017 年。
- (3) 萩原優騎 「ローカルとグローバルの関係の再検討」科学社会学会、2017 年。
- (4) 萩原優騎 「道徳的寛容から機能的寛容へ」村上陽一郎先生 傘寿のお祝いの会 記念シンポジウム、2016 年、招待講演。
- (5) 萩原優騎 「ローカル・ノレッジの形成と『慣れ』の問題」科学技術社会論学会、2016 年。

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

- (1) 研究代表者
萩原 優騎 (HAGIWARA, Yuki)
東京海洋大学・学術研究院・准教授
研究者番号：20468565

(2) 研究分担者 ()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：

(4) 研究協力者 ()